

昭和二十四年七月二十三日
第三種郵便物認可
行(毎月一回・十五日発行)

(通第七十六号)

慈

光

第七卷

第七號

目 次

- 乃至一念の大悲……………花田正夫…(1)
- ありそなこと……………池山栄吉…(7)
- 亡き子の導き……………ジャータカ物語…(11)
- 歎異抄讀歌……………浪本蕉一…(14)

乃至一念の大悲を仰ぐ

花田正夫

昨年秋、京都の東山女子大の信友、佐々木徹真さんから酒井演幽師の七週忌記念の書で御息發行の『法燈』を頂きました。

更に今春に、四国の坂出に仮寓せられる飯塚さださんから、はからずも酒井演幽師の一週忌記念の書で御令室發行の『法燈』を頂き、未見の師ながら、御縁の深さを痛感して居りました。

演幽師は東陽和上、臼杵老師、真田増丸先生の法流をうけられ、九州や関西方面に高く法燈を掲げられて不惜身命の御活動を続けられたのでありますが、宿痼遂に悪化せられて、昭和二十三年、五十九歳の御生涯を光茫を地に遠く放たれつつ終られたのであります。

さて斯様に重ね々御著書を頂きましたも、自らすすんで身を入れて読むといふことは、私如き我慢我執の強い者

酒井師の病床雑記

昼夜、病苦のため一声のお念仏も称へ得ない罪業深きこの身である。

第十八願、衆生往生の本願に、一声の称名をも往因（往生の業因）として求めましますぬみむね仰いで、感涙にむせぶ。

「根機つたなしとして卑下すべからず、仏に下根を救ふ大悲あり。行業おろそかなりとて疑ふべからず。經に乃至一念の文あり。仏語に虚妄なし本願にあやまりあらんや」幾度、苦惱の病中、胸底にくりかへし味識させて頂いたことであらう。

病みつかれ み名ひとこそも 称へ得ず
弘誓の みむね いよよたふとし

極度の衰弱と高熱。目がまふ。世界が廻る。目があかぬ。聞くことがつらい。一言の発声が苦しい。沈黙、瞑目。光の刺戟のうすい静寂な暗さを望む。光雲無碍如虚空。闇を破る光と共に、また光を覆ふ雲霧もまた限りなき御慈悲なることを味はふ。

以上の日記は、私にとつて実に百雷の震撼とも申すべき感動を身心にうけたのであります。何といふ尊くも有難い

には至難なことでありました。それには時節の到来といふことが必要でありました。

ところが、今春以来、誌友や、知人の方々から、あちらからも、こちらからも、難病の訴へやら、不治の報告をうけ、且つは最近に某死刑囚の方との御縁が開かれるなど、外にきびしい教を被るばかりでなく、私自身が小康を得ては居りますが心筋障害の身とて、薄氷上の生活でありますので、病・死と信仰問題の実際といふことが、真剣な私の問題となつて参りました。

そこで『法燈』に掲げられてあります、病床日誌や病床雑記等々、一頁、一頁、感銘深く拜読して居りました。ところが、演幽師のいよいよ御臨末近い時の日誌の次の記事を一読し、異様の感動をいたしました。

信証でありませうか。何といふ力強くもたのもしい本願でありませうか。

生死巖頭に立ち給うて、乃至一念の大悲大願を仰がれる尊容、漣々として眼前に浮び、謝すべき言葉もありません。全く生身の仏陀に遭ふ如くでありました。

腎臓、膀胱、尿道、痔、神経痛、等々の病苦、遂に衰弱の極に達せられて、一言の発声が苦しく、一声の念仏も称へられないといふ瀬戸きはに立たれて、衆生往生の本願、第十八の願にも、願成就の文にも、往生の業因として、一声の称名をも求めましますまね大悲心に感泣せられてゐる。そこに一声の念仏をも條件とせられない大悲とは、いよ

々となつては一声の念仏も称へ得ない者を、そんなことでは駄目であると見捨て給はずして、煩惱具足の凡夫として一声の念仏も出ないのが当然であると、称へようと思つても称へ得ない、力なくして終る身を、飽迄も呆れ給はず、そこを御洞察下さつての大悲と知らされては、唯々感泣随喜の外はありません。

歎異抄の第一章に

「弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をば遂ぐるなりと信じて、念仏申さんと思ひ立つころのおこるとき、即ち攝取不捨の利益にあづけしめ給ふなり」

と、聖人は口伝して居られます。弥陀の誓願の不思議、第十八願のみこころを頂いて、乃至一念であります。そこを「念仏申さんと思ひ立つところのおこるとき」と御信管下されて、まだ一声の念仏も出ず、有難いといふ微喜のころもおこらぬさきに、即ち「おもひ立つところのおこるとき」に、同時に、攝取不捨のめぐみにあづからして下さるのであります。そこに一声の念仏も、歓喜の心をも、往生の業因とされてない、その深い思しめしが、いよいよ尊まれるのであります。

私は初め、「思ひ立つところのおこるとき」とまできはどく申されなくても、称名が口に浮ぶのと、思ひ立つところのおこるのも、殆んど同時であるか、聖人はそこをまことにはどく教へて下さることだ、と位に思つて、私に用事のない言葉として居りました。ところがさうではないので、この御言葉がましませばこそ、いよ／＼となつて、念仏も申されず、よろこぶころも無く、急ぎ浄土へ参りたき心のおこらぬ者を、仏かねて煩惱具足の凡夫、いづれの行も及び難き身としろし召して、その故にこそ、ことに憐み給ふ大悲大願でましますことがいよ／＼渴仰せられるのであります。

安波氏の臨末法語

て下さる仏様のあるといふことが事実だから、仏様の本願力によつて私の往生させて頂くといふことも又さとりを開かせて頂くと云ふことも、間違ひないのであります……称名。

この信念は、最後の近づくにつれ、イヨ／＼はつきりさせて頂きます……称名

私がこの尊いお慈悲にあはせて頂きましたのは、全く宿縁のお蔭であります。皆様どうか、この仏様の御真実に気づかせて頂かれんことを、最後のお別れにあたりお願ひいたします。これが私の永らくのお世話になつた皆様へのお礼であります……称名

安波先生も「臨終、病苦のさし迫られては、喜びも出さぬ念仏も申されぬ」と慚悔されつ、「コノ者をドコ／＼までもお相手下さる仏の御真実」に満足して居られる尊容を拜するのであります。そこに、一声の念仏も、踊躍歡喜の心も、急ぎ浄土へ参りたき心も、往生の業因とされなない、乃至一念と誓はれた大悲大願のたのもしさにやはらぎ安んじて居られるのであります。

又斯うした最後の安波勲八先生の御病床に、近角先生が懇切周到、慈悲あふれる見舞文を送られました。何度繰り返して拜読いたしましたも、随喜感悦の他はありません。

安波勲八医師は不思議な御縁から近角先生と東陽和上を二人の善知識と仰いで信仰生活を続けて居られましたが、四十にもならぬ若さで胃癌となられ、九大医学部の教授から、手術不可能との宣告をうけられたのであります。そのときは四十分間も本を読んでもサツパリ解らぬといふ有様でありましたが、その者を憐んで下さる大悲に立ちかへられて平常心を得られ、別府に御帰宅後も体力の残存する限りは働かせて呉れと申されて、しばらく眼科医としての診療を続けられたのであります。大正十五年八月十八日に臨末の法話をせられて遂に逝かれたのであります。

「最早、食物も咽を通らず、飲み物も欲しくない。イヨ／＼臨終も近づいたことと思ふが、幸に平素いだけいて居つた信仰の間違つて居なかつたと言ふことを、ます／＼深く味ふのであります……称名

私は平常の時はお慈悲を喜び、死に直面しても平気であるとか、安心であるとか、大きなことを言うて居りましたが、イヨ／＼となりては、病苦に責められて、喜ばれもせず、念仏も出さず、ドコ／＼までもツマラヌ奴であるが、コノ者を、ドコ／＼迄も見捨てず、相手にして下さる仏様の御真実によりて満足させて頂き、コノドコ迄も仕様のなき私を相手にし

全く弥陀仏の本願の思しめしをそのまま御伝へ下さいますので、誰んで引文させて頂きます。

近角先生の御見舞の書簡

「……。拜承仕り候へば、此頃は御平臥の趣、いかばかり御心つまりし御事と存じ奉り候。

平素より十分御安心の御事と存じ候へども、先づ何よりも申し上げたきは、歎異鈔第九章、唯圓房に對する聖人の御教化に候。定めて御病氣重りたまひては唯圓房の御たづね、定めて御心のありのままと存じ候。

念仏申され候も定めて平素の如き、踊躍歡喜の心も御おろそかに候はんと存じ候。勿論急ぎ浄土へ参りたしとも思召されざるのみならず、ます／＼心細く思しめしたまはんと存じ候。

然るに聖人は、親鸞も此不審ありつるに勲八同じ心にてありけりと仰せられ候。

仰せの如く、よく／＼案じみれば天に踊り地に躍るほどに喜ぶべきことなるに、喜ばれぬ我等なり。

聖人、喜ばれずともよしと宣へるにあらず、若し喜ばずともよし位のことなれば、勿論喜ばれずともよしとはいへ、喜ぶにすぎたることなし。同じことなれば喜びたしとの望みあるべし。

しかるに聖人は、喜ばずともよしと宣へるに非ず、喜ば

ぬにて往生は一定と仰せられ候。若し喜ばれたらば往生は不定たるべしとの意に候。

それはまたあまりに極端と思しめし候はんかなれど、現に口伝鈔には「三毒もいたく強盛ならず、善心頻りに起らば往生不定の思あるべし」と仰せられ候。

たとへば天災地変等のありたる時、慈善の配給品を与へられしとき、代価を払はずともよきかといふに、勿論慈悲なり、払はずともよし、といふも一応の答なり。しかれども徹底的に答ふるには、払へぬものにこそ与ふべけれ、若し払へる人には与へざるなり。慈善品は代価の払へぬにてこそ与ふるなり、と申さねばならぬ。

今も喜ばずともよし位のことにあらず、若し其様に病篤きとき喜べるならば、煩惱具足の凡夫に非ずやと思ふゆへに、却て往生不定なり。

喜べぬ処を察したまひて、これを可愛想に思し召し下さるが如來の御慈悲なれば、喜べたらば却て往生不定、喜べぬにて往生は一定との仰に候。

何故なれば、喜べぬは煩惱の爲に押へられたるなり、しかるに仏かねてしろしめして、其喜ばれぬ煩惱具足の凡夫を仰せられ候ことなれば、かくまでの大慈大悲にてましますかと覚えて、いよいよたのもしくおほゆるものなりとの御教化に候。

特に次の一段の、又急ぎ浄土へ参りたき心のなくて、い最後まで名残り惜しくて、力なくして終る次第に候。或人私にたづねて曰く。

「力なくして終る時、念仏称へられずともよろしきかと。予曰く

「念仏となへられぬが当然なり。その称へられぬのを、殊に憐みたまふなり」と。其人流涕して曰く。

「先日以來、病苦のために念仏出でず、人また念仏の出でぬを憂ひてくれ候。しかるに、その念仏の出ぬことを殊に憐みたまふか」と喜び申され候。

恐くは私が色々只今御教訓を受け候事と存じ候へども、色々御病床の事御察し申上げ、歎異鈔第九章のこころを告白見舞申上げ候、返すくも大慈大悲の御親心を益々御喜びあらせられ度候。

嗚呼、回願任り候へば、不可思議の御因縁にて、共に御同行、御同朋として如來大悲の御恩を喜び候兄は、今や蓮華蔵世界の如來の宅門に入りて、極楽世界の屋門をきはめたまひて、直に蘭林遊戯地門より出でて我等を教化したまふべし。

明日の夜は照りますものと知りながら
入るさの月の惜しくもあるかな
何れは浄土に再会、又還相廻向の御身となりたまふと存

ささか所勞のこともあれば死なんするやらんと心細くおほゆることも煩惱の所為なり、とは、如何に聖人が歎八君を察して御教化下さることかと存じ候。

不肖等この心持は深くいただき居り候へども、未だ重病の實際に遭遇せざるために、甚だ以て横着至極に御座候。しかし無常迅速たることは、我や先、人や先、今日ともしらず、明日とも知らず日暮し致し居り候。

然れども貴兄の如き實際に遭遇したまふ今日の御境遇は如何に心細く御思しめし遊され候事と御察し申上候。我御慈悲をいただきてより約三十年、未だ毫も早く浄土へ参りたしなど微塵も思はず、よく／＼煩惱の興盛と存じ候のみならず、未だ死なんするやらんと心細くだに思はず。今や御身は如何に心細く思し召すらん。御尊問の研究といひ、御妻子に対する愛着といひ、無量／＼の御心緒、御察し申し上げ候。

然るに聖人は、所勞のこともあれば、死なんするやらんと心細く候べし、と御察し下され候。如何にも大悲深重の御慈悲と存じ候。

名残り惜しく思ひながら、娑婆の縁つきて、力なくして終るとき彼土に於きて深き夢さめ生死の醒醒むる時、弥陀同体の御覚と存じ候。

それまでは一向苦しみの凡夫に候。若しこの苦を受けざるならば凡夫の数に入らず、我等凡夫たらん已上は臨終の

じ候へども、実に名残り惜しきはみに候………」

以上の御書簡を何度も繰り返し／＼拜読致して居ります。そこに乃至一念の大悲のありつたけを、微に入り細にわたつての御教化を被ることが出来るのであります。

斯る大悲大願に浴しては、久遠劫より流転せる苦惱の旧里のすてがたく、力なくして終る身も、そのたのもしさに感泣、随喜、満足の外はありません。

人として生れ、よくもかかる広大な御真実にあひまらせしことと、世に生れさせて頂いた裸のなりに満足感謝させられるのであります。

それなれば、その随喜感謝のままで終れるかと申しますとさうではないので、喜ぶ心の下からすぐにまた恩愛のきづなにひかれ、生死の苦に沈みますが、その苦惱の中に、きづなの底に、無限の大悲、やむ時なき、攝取不捨の御手におさめられて、ひきもどされるのであります。そしてまた心惑ひ、惑うては引きもどされ／＼して、念仏成仏せしめて下さるのであります。丁度それは薪に火の燃えついたやうで、薪のあらう限り火は何処までも燃えつづいて了ふのと同様であります。長時不断の火と燃える大悲の力で我身の煩惱の薪を焼きつづいて下さるのであります。それはひとへに仏智の不思議誓願の不思議によるのであります。

ありそなごと

池山榮吉

註。これは独逸の文士チヨケの小説を引用された先生の原稿であります。これと同様な講話もして下さいました。その御講話を聞きました信友が寄り合ふと何時も「ありそなこと」と言ひ合つて先生を偲ぶますがにして居ります。私自身は、例の八月十五日、敗戦の日、文字通りにこの言葉を無量の感慨をこめて繰り返しました。狭心症発作の日も亦。 聚 墨 生

参議ストリークには「Eis-ist sehr moglich」といふ口癖があつた。これを訳すると「それは甚だ可能である」といふのだが、砕いていふと「それは随分ありさうなことだ」とか「大方そんなことになるかもしれない」とか「さうしたことも無いとは限るまい」とかいつたやうな意味である。

ストリークはこの一句を、公私を問はず、筆舌をえらばず、折に触れ、機に臨んで、しきりに繰返されたのであつた。だから同僚や大臣達と政治上の用務を話し合ふ時とはより、君主にたてまつる意見書の中にさえも出てくることはめづらしくなかつた。さうした場合、いつも「また例のお株がはじまつたナ」と、はたの人達の間に、微笑笑

安の極におちいつたのであつた。

ところで、この社会全般の動搖、いはゆる旋風時代がストリークにどう影響したかといふと、不思議にも彼にいつもきまつて、旧政権の末期に現任の地位を追放されて、新政権確立のあかつきには、前よりも一層重要な地位にぬきんでられるといふ、あつらえむきの成行に終始するのが例であつた。そして一体どうしてさうなつたかといふと、例の口癖がもとであつたのであるから誠に妙である。

その一例をあけると、それはバリに勃発した革命の火の手が、枯野を焼き払ふいきほひで、国の各地に燃え移つて行つた頃であつた。

ストリークの臣事してゐる選挙候が親臨して、御前会議が開かれたことがあつて、ストリークも参議として列席してゐた。そして会議も一應終つてから、一坐の話題にのほつたのが隣国の異変であつた。その際、選挙候は、フランス国民を世界中で一番賤しむべき民族だとののしり、且つ我が国の如き立派な国民には、決してあゝした昏迷におちることは断じて無いと言いきつて、にはかにストリークに向つて「どうかね。君はそんなことがあり得ると思ふかね」と話しかけられた。

彼はその時、何かほかのことに気を取られてゐて、候の談話を半ばききもらしてゐたので、内心すこぶるドギマギ

の交はされるのが常であつた。

さういふことはあつたけれど、参議は世間の尊敬を博してゐたし、また本當にそれに値する人物でもあつた。さしてさうなる上に、秘密の鍵として役立つたのが「ありそなこと」といふ例の口癖一つなのである。この口癖が常に彼の考を練つたり、直したりする指針として働いて、その結果彼の思想や行動をよくとのへたり、みちびいたりして、彼の生涯の全体をまで何度かへた程であつた。人もあらうに、高い教養と、すきとほつた識見を持つ人として世に知られたストリークにして、なほそうしたことがあらうとは、誰にも想像もつかないことであるが、しかし実際それがあり得たのであつた。

彼は若い時分から、すつと独逸西部の或小連邦に任官してゐたのであつたが、勤め大事に奉公して、やう／＼高官になれた頃、丁度フランス革命の時代であつた。それからといふものは、ここかしこの国や政府が顛覆・新興・復旧、併合・分裂、等々革命や反革命の嵐の吹きつものるのにつれ、大小さまざまの政変が随所に勃発して、世を挙げて不

したが、何んとか返答しなければならぬので、肩をすほめながら、例によつて「Eis-ist sehr möglich. すなはち「さうしたことも無いとは限りませんまい。」とやつてしまつた。

途中でハツと気がついて、しまつたとは思ひながら、トッサに、その判断は間違つてはゐるまいと確信して一応は弁明はしたものの、その果てで、御おほへ芽出度からずといふ羽目におちいつて、折角の官職を棒に振つて了つたのは言ふまでもない、「ストリークは馬鹿だ」これが当時の世評であつた。

が、それから幾らもたないうちに、フランスの軍勢がライン河を渡つて独逸領に侵入して来て、選挙候はあはてふためいてゴツソリと亡命の旅にさまよふ身となつたのに反して、ストリークは君主専制の犠牲者だといふので新政府側の認めるところとなつて、相当重要な地位に迎へられた。

ところが、フランス政府から特派された監察使が、その御迎の宴席でストリークにむかつて

「諸国の今迄の王候達が、いままほ我がフランス大国民に対して抵抗を敢てしようとする気がしれない。全く馬鹿な者共だ。

よしや天地がひつくり返る代とならうともだ、わがフラ

ンスにまたと王政の施かれるなんて、夢にも思へることつちやない。ネー、君、そぢやないか」と話しかけた。いい加減に跋を合はせるといふことの出来ない、正直一途のストリークは、

「お説の通り、いかにもそんなことがあり得ようとは思へませんが……。」

と前置きして「Es ist sehr möglich。すなはち、必ずしも無いとはかぎりません。」

と答へてしまつた。監察使は目をみはつて

「なに？無いとは限るまいつて？」

と一坐がたまるほどの大声で怒鳴つた。ストリークは真面目に陳弁これつとめなければ、あとの祭りであつた。その場は無事にすんだが、間もなくストリークはその地位から顛落したばかりでなく、いかげしい言説を弄するといふかどで刑事の審問を受ける憂目をさへ見なければならなかつた。

さて、それも長くは続かなかつた。さしもねばり強く居据つて、あたりに人なしといふ風にのさばつた共和主義の低気圧も、後から次第にはり出して来た独裁の高気圧におし崩されて、代つて出現したのがナポレオンの帝政の天下であつた。

決するところがあつたのであらう。またもや例によつて、肩をすほめながら答えたところは Es ist sehr möglich。すなはち、或はさうかも知れませんが、の口癖であつた。すると参議名簿からストリークの名が消えて了つたのは当然、ストリークは馬鹿だといふ評判が再びひろがつた。

然し、天下廻り持、といふことわざがここにも通用する。ナポレオンはモスコの一戦で一敗地にまみれて、急転直下、ナポレオンとその一党は通り魔のやうに欧州の天地から影を没して了ふと、またもや前と打つてかはつて、ストリークは予言者だといふ名声が高くなつた。

つづいて種々の嵐のあとに、再び復旧した新時代になつて旧政府から追放せられて野に下つたストリークが、再び恩典に浴したのは言ふまでもない。

ストリークの起倒翁のやうな生活記録はこれで終つたのではない、繰り返し、又々次の番が控へてゐるのであるが、それを詳しく紹介するのがこの物語の目的ではない、それはむしろ以下に述べるところにあるのだから、まあこの辺で打ち切るとしよう。

参議は自分に口癖のあることを、自分でもよく知つてゐた。しかしそれを改めようとしなければかりか、飽くまで、

するとストリークは、その地方で識見が高いので有名なばかりでなく、従来穩健派と呼ばれた団体に属しているの

で、今度その地方に樹立されたナポレオンの息のかかつた新政権から呼び出されて、高い地位をあてがはれると同時に、ストリークに対するその地方の尊崇はいよ／＼高くなり、政治上の予言者と彼を呼ぶ者もすくなくないやうになつた。

この政治上の予言者といふ風評に或は関連があつたかどうかはわからないが、当時、世間のうはさきによると、当時ナポレオンは、かねて参議ストリークに、政治問題について予言する天才のあることを聞き知つて居た。それかあらぬか、ナポレオンが征露の首途に立つすこし前、彼の幕僚の一人が参議のもとを訪れて、このついでといつた風にして、今度の遠征についてのお見込は？と、参議の意見をたづねた。

参議には、このたづねは余りに意外であつたので、答へようとも思はなかつた。その様子が幕僚には異様にうけとられたのであらう

「わしの予想では、味方はペテルブルグでクリスマスを迎ふことが出来ると思つとるのだが、あなたの見込みでは失敗に帰するおそれが濃いとでもいふのかな」と問ひつめた。すると参議はその間に、心ひそかに思ひ

その Es ist sehr möglich といふ四つの言葉を大切に感じて、或日のこと、一人子息のフリッツにむかつて、自分と同じやうに同じ言葉を言ひ慣らすやうにと、ムキになつて所望するのであつた。

子息は父のたつての勧めに、当惑するよりはむしろ呆れ顔に

「お父さんの口癖は、もう世間の通り相場になつてゐるんだから人も有してくれませんが、しかし私が今更それをうけうりすると、キツト猿の人真似の外に出られないのですから、それは可笑しく思はれますよ。好んで世間の物笑ひとなるなんて、気がきかない。御免ですわね」と言つてなかく承知しさうもない。参議は

「それはそうかも知れないね。しかし、かまやしないじやないか。こんな簡単な言葉のおかげで、安らかさと、落着くと、思慮深さと、任せとが招来されるとすれば、得るところ余りにも大きいじやないか。

で、もしお前が、笑はれるのがこはさに、口に出して言ふのがいやだつたら、せめて心のうちで、折にふれては、その言葉を思つてみるとしたらどうだね……。」と醇々として語り続けるのであつた。

続く。

亡き子の導き

ヂャー々カ物語

お釈迦様が祇園精舎にをられました時のことであります。かねてから仏様に帰依してゐた一人の長者が、天にも地にも、ただ一人の子を病氣の爲に失ひました。彼は悲しみのあまり、入浴することも、食事することも忘れ、家事も手につかず、お釈迦様にお仕へ申す事も怠つて、ただ「わしの可愛い子は、わしを捨てて死んだ。」

わしより先に行つてしまつた。」
と云ひつづけて泣き悲しんでをりました。
折しも、お釈迦様は朝早く、大慈悲の御まなこを以て、世界を眺め給うて、かの長者が仏道に入る宿縁の熟してゐる事をお見抜きになりました。

そこで翌日托鉢に行かれ、御弟子阿難を従へて、その長者の村にあゆみをはこばれました。彼の家の者達は御座を設けて仏様をお招き申し上げ、長者をそのお側近くへ導きはずと、お釈迦様は長者が座につくのを待ち受けられて、暖い御同情のこもつたお言葉で話しかけられて

「長者よ、一人子を失つてさぞ悲しいことであらう」と御慰問なされると、彼はもう涙にかすれる声で「ハイ。世尊よ！」

そこで丁度、今日も父が墓地に来て泣いてゐる時、身に立派な飾りをつけた少年の姿となつて、そこに現れ、両手を頭に載せて、大声で泣き叫んでをりました。

そこで父なる長者は、泣き声を聞きつけて、その少年を見出し、非常に可愛く思つて、側に近づいていつて話しかけました。

「可愛い子だね。このお墓へ来て何をそんなに泣いてゐるのか。キラ／＼とまぶしいほどに輝く耳環をかざり、花環をかけた身体には香をたきこめてゐるのに、こんな淋しい墓地に来て、腕を上げて泣きくれているのは、一体どんな悲しみがあるのか？」

と。少年はこれに答へて
「黄金で作つた車体は、これこの様に光り輝く立派なのがあるけれど、肝心の両方の車輪がないのでどうすることも出来ないのです。
あまりなまさないの、もう一層死んで了はうかと思つてゐます」

これを聞いた長者は、可哀想でたまらなくなつて、
「可愛い子よ。それではね、黄金、白金、宝の珠をちりばめた車輪をお前の欲しい通りにこしらへて上げよう」と云ひますと、少年は頭を左右に振つて

「太陽と月が昼夜の天空に輝くでせう。私の黄金の車の両輪には、あの太陽と月に及ぶものはありません。あれが

とやつとお答へ申しますや、お釈迦様は更に御言葉を續けられて

「長者よ。古の賢者も子を失つて悲しみに沈んでゐたが、覺者の教を聞いて『去つたものは再び得ることは出来ない』といふ眞実をさとつて、遂に悲しみから解脱した」と仰せになつて、遠い過去の世の出来事を次の様に御物語りになりました。

その昔、財産も豊かに、権勢もある長者の子が、十五六才の若さで病氣にかかつてこの世を去り、天上界に生れました。

その子の父は、それ以来歎き悲しんで、仕事もせず、ただ墓地に行つて、一塊の灰のまはりをウロ／＼とさまよひ歩いては涙にくれて居りました。

さて今はすでに天上界に生れ更つた子は、この父の悲しみ歎く有様を見て、何とかして父のこの悲歎を取り除いて上げたいものだと思ひ、種々に思案を重ねた挙句に、遂に一つの妙案を思ひつきました。

欲しいのです」

と答へました。長者はこれを聞くや否や

「何といふお前はおろかものだらう。いくら望んでも得られないと、これ程ハッキリわかり切つてゐるものを、それをお前は欲しがつて、得られなければ死んでしまはうとまで云つてゐる。

お前が月日を得ることは、天地にあり得ないのだから、命を捨てても無駄なことだ」

と。この時すかさず少年の言ふには
「長者よ。御覧なさい。たとへ得られなくつても月日の歩みはまだこの目に見る事が出来るではありませんか。

それなのにあなたは、永劫に見る事の出来ない死者を慕うて、命も絶えんばかりに歎いてをられる。そのあなたとわたしと、いづれの悲しみが愚かでありませうか？」

と。この言葉を聞いた長者は、ハツと胸うたれて
「若者よ。あなたは私に眞実を語つてくれた。私の悲しみこそは、ほんたうに愚かであつた。月を得ようとて子供が泣く如くに、私は去つて帰らぬ死者を恋ひ悲しんでゐたのであつた……」

斯くて彼は、限らない悲歎から解脱し、この少年に感謝し、次の讃歌を唱へました。

油を注がれし火の如く
われは燃えさかりたるを
水をもて注ぎかくるが如く
汝は我が苦を抜き去りぬ

我が心に喰ひ入りたる箭をば
汝はよく抜き去りぬ

われ悲しみに沈めるに
子ゆえの悲しみを打ち払へるは
これ我が箭の抜かれしなり

若者よ、汝が言葉を開きて
わが悲しみと憂ひと
消え去りてあとかたもなし

斯く長者の晴れ渡る声を聞いた少年は、
「あなたが、泣き悲しんでをられる亡き子は、誰ありませう、この私であります。私は今天界に生れて居ります。これからのちは決していたづらにお歎き下さいます。どうぞ正しい道を聞きひらいて下さいませ」とねんごろに告げて、天界に帰つて行きました。そして長者も子の言葉通りにひたすらにまことの道を修めて行きました。

歎 異 鈔 讚

学生の日であつた
歎異鈔を読んだことがあつた
しめつばいと思つただけで
何の感応もなかつた
何の声も聞えて来なかつた
私には無用の本であつた
本は棚の隅に置かれたまま
時々、目に解れたが
そのうちどこかへ消えてしまつた
……二十年たつた……

ふとこの本が読みたくなつた
新しいのを一冊買つて読んで見た
こんどは感応があつた
不思議な声が聞えて来た
すぐ耳元で
冥にはつきり聞えて来た
わたしの荒んだ心に
泌み入るやうに聞えて来る声

お釈迦様は以上の御物語をなされて「遠い昔に法を説いた長者の子こそ菩薩として道を修めてゐた自分であつた」と仰せになり、聞き終つたかの長者は、迷ひの夢からさめ、仏様のお慈悲にまみがへりました。

築紫野春草氏 歌集「雲霧」より抄出

幼手を開くばらりが五つぞとわれに言ひきかすもつともらしく
大きくなつたらうんとお金はもどすからもう五圓くれと幼孫は言ふ
竹筒に水くましまして散らす子のはしやぎ止めすコスモスのかけに
幼な子はそと寄りゆけど大き下駄引きする音に蜻蛉飛び立つ
かけといふ故自動車かけば」とこから来たどこへ行くのか」と稚子は問ふ
自転車に乗せて走れば牛に馬にいちいちもの言ふわが幼な子は

浪 本 蕉 一

その声は深い声であつた
こんな深い声が世にあるかと思えた
……「いつれの行も及びがたき身なれば」……

かうした声が聞えるたびに
わたしは黙つて うなづいた
自分の身をかへりみて
ほんたうにその通りだと思つた
一言の理窟もなかつた
ただ黙つて読んでゆけばよかつた
読み終つたあと
思はずため息が出た
心のしこりが解けたやうな気がした
すがすがしい風が頬をなでた

わたくしはそつとこの本をおしいただいて
いつでも読めるやうに
すぐ手にとれるところにおいた。

昭和廿九年九月、短歌草原誌所載。「楓の木」より。

編集後記

暑さもきびしい頃、海に山に心きそはれる頃となりました。御元気で暑さを越えて下さいと皆様に申し上げながら、そのまゝ、自分自身へ云ひきかせて居ります。

この時、近角常観先生の「慈愛と眞実」が京都市下京区油小路通花屋町上ル丁子屋書店から発行せられました。定価百二十円送料十二円。振替京都一四五〇番であります。

まことに「よきひと」にお遭い申すことが難しいと私はかねて説かれ、且つ「よき教」を信ずることもまれであると誠め且つ勧められてあります。

先般当市で開催された全国教師大会の際、新潟の小室華雲さんと久方振りに談合の機会を得ました。

「私は別にとりたてて求道したというのではありませんが、よく求道会館に寄せて頂いては聞くともなしに長い年月に渡つてお話を聞かせて貰いました。ところが最近になり、雪深い北陸の自坊に起居するやうになり、時々信仰問題の話を互にし合ふという時、自分て話しながら、自分の話してゐることは、近角先生から度々承つたこととで、その話が自分の心の中にチャーンと残つてゐるのに驚くことがあります。」

と温まる会見をいたしました。これらは皆、よき人、よき書に遭ふものの限らない

よるこびの一つであります。

△「ありそなこと」は、人生にはどんなことでもあり得るのだといふことを深く省みさせられる、池山先生の原稿であります。

次回に当のストリーク郷が、竹馬の友に裏切られ、相思相愛の貴族令嬢にそむかれるといふ、夢にも想像しなかつた痛ましい事件から、その涙と悲しみの末に自然に身についた言葉であることを告白してをります。

「よるづのことみなもてそらごとたわこ」とまことあることなきに「までの実相を知らしめられ、いやといへぬ眞実さに心うたれるものがあります。聖書誌からすこし和らげて転載。

△「乃至一念の大悲」を病苦の底に感佩された酒井師の感涙に心うたれて、一気何勢稿了いたしましたので、後念相続の上から乃至一念を渴仰申したので、初起一念からのみ味ふことしか知り得なかつた私には全く切めての信味でありました。一念即多念、多念即一念の妙消息もいよく、感佩され、こ十日余り、このことばかりに心ひかれて「念仏一声だに申し得ない者を、仏かねてしるし召しての大悲大願とは」と仰いで念仏申させて頂いて居ります。

△亡き子の導きの、ジャータカ物語は、仏陀の巧みな教によつて、眞実を伝へ、身心に徹せしめられるものがあります。錯覚のやまぬ眼に、パルテノン建築が如何に胸心してゐるか、それにつけても虚仮の身に眞実への開眼を念じ給ふ仏陀の御苦勞、念じ念じてやみ給ふことなきを仰ぐ次第であります。

御案内

毎月、第一、三、三日曜、午後一時半。日曜講話。一道会館。

市電、新郊道一丁目下車、東へ一丁。名鉄、呼続駅下車。徒歩約十分。

毎月廿四日、午前、午後。

法話会。昭和区小櫻町、教西寺市電、御器所通下車。市バス、北山通下車。櫻花学園の東。

定価 一部 十七円 (送共)
半年 百四 (送共)
一年 二百四 (送共)

名古屋市南区駄上町二ノ二八
編集・発行人 花田 正夫
名古屋市千種区千種町馬走二
印刷 人 奥川 正生
名古屋市南区駄上町二ノ二八

發行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

聚墨生記

慈光第七卷 第七号 昭和三十年七月十五日発行 (毎月一回十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可